

第6回 「ポートランド調査全体」

日時：平成 25 年 8 月 17 日（土）～平成 25 年 8 月 24 日（土）

場所：オレゴン州ポートランド市

●市内探索（City Exploration） 8月18日（日） 9:00am～5:00pm

班ごとに目的を設定し、市内にインタビューに出かけた。各班から出されたインタビューの報告を踏まえて浮かび上がった課題等は次のとおりである。

- 目的を持ったエンターテイメントはとても効果的である。
- ポートランドは若い人が他の所からリタイアしてくる所という見方もあり、雇用の問題があるのではないか。
- 根本の価値観は何か。
- ボランティアは個人から組織（グループ）の活動に進むものではないか
- 多様性（diversity）と多層性（multilayer）
- 行政へのアクセスにとって教育は重要。人によって教育の捉え方が異なる。
- バラツキを前提にしたコミュニティや組織へのアクセシビリティが保障されているのか
- 暮らしの中で何が課題なのか。国に政策として提案していくことは何か。

●米国地方行政について（Intro to U.S Local Gov.） 8月19日（月） 1:30pm～5:00pm

市民の行政観は、市民に主権があり政府は我々の持ち物であるとする。また、社会学的に最初に個人であり、ボトムアップ型で次に共同体を位置づけている。これに対して日本は、最初にコミュニティがあり、トップダウン型でパターナリズムである。コミュニティの定義は、①人々が住む地域、②共同体として人々が集まる抽象的概念がある。両国のスタートポイントの違いは、個人のチョイスがあるかないかである。

米国の行政組織は、一般目的と学区などの特別目的の組織があるが、市民が目的別に組織化した証である。そのため、行政組織が重複する地域が存在することになる。

また、ポートランド市は市民活動のルツボであり、その活動は少人数から始まる。

●アーバン・グリーン（Urban Green） 8月20日（火） 9:30am～11:30pm

ポートランドからオーク・グローブまで MAX を開通させるオレンジライン事業に対し、当初、現状を変えたくない市民の反対意見が続出した。アーバン・グリーンは、道路や建物の更新による環境改善も含めて、より住みやすくするための公共交通機関として期待し、住民にアウトリーチし続け、小さなミーティング（シャレット）を重ねて住民の意見を出し合い創造を膨らませていった。アーバン・グリーンは決して大きな組織ではなく、2～3人が中心となって多くの人を巻き込んでいった。トライメット（鉄道事業目的政府機関）やメトロ（州政府機関）の行政職員はアーバン・グリーンとの連携による事業の推進を経験するこ

とに誇りを持っているはず（チップス氏談）。住民はアイデアを出し続けるが、クレージーなアイデアは淘汰されていくものであり、物事を決定していくのに投票などせずに話し合いで決めていく。アーバン・グリーンは調整するだけであり、トライメットのコミュニティ担当とも連携して情報公開も積極的に行っている。

●メトロ（Metro） 8月20日（火）1:30pm～4:00pm

メトロ（州政府機関）の重要な役割は、郊外の保護、資源リサイクル、コンベンションセンター（国際会議場）や動物園の施設管理である。特に、交通や都市計画は重要な任務である。また、メトロとカウンティ、シティの連携協力のもと、①Public Access、②Cultural and Historic Interpretation、③Healty Habitat、④Economic Development をコアの価値として活動している。市民参加の形態としては、行政主体のものは行政が表明し、資源調達する。また、コミュニティ主体のものはコミュニティが行政に持ちかけイノベータ的、革新的な成果が期待される。この場合の課題は、均一性の問題や行政の外で活動するイメージがあること、安全確保するための規制が必要であることが挙げられる。

メトロ内部の合意形成については、信頼関係をつくってから助成の手続きを進め、議会で決定する。なお、助成の要件はプロジェクトごとに決めている。なお、住民主体の事業を進めるには、信頼関係をつくるのに時間と忍耐が必要である。コミュニティが主体のときにはパートナーシップを結ぶ。そして、ステークホルダーを全てまとめる必要がある。メトロは大きいプロジェクトやパートナーシップ、他の財源の紹介をするなども支援している。

●耐性のあるコミュニティづくりのためのリーダーシップ（Leadership for Resilient Communities） 8月21日（水）9:00am～12:00am

ポートランドは約束（engagement）するまち。コミュニティがあり、巻き込むように心がけている。また、クリーンインダストリーが多く、意図的につくられてきたように思う（ジュディー氏談）。耐性強いコミュニティづくりとは、技術や計画でもなく、信頼（faith）、チャレンジ、責任の共有ではないか（ロバート氏談）。また、科学的な事実やその活用、政治の把握とリーダーシップではないか、そして、多くの選択肢があり機会を活用できることではないか（スーザン氏談）。また、多くの人に関わった方が効果的であり、コラボレーションに着目し居心地のよい環境づくりを行い、いかに対等なパートナーとしてガバナンスを行うことができるかどうかではないか（ブラウン氏談）。さらに、考える人たちの人集めと人材育成が必要（ボブケレット氏談）。ポートランドは若者と高齢者の間の層が少ない。コミュニティと行政、草の根の活動が結合（combine）してプライドの見直し（量から質への転換）をする必要がある。そして、市民はシリカルにならないように行政と対応しチャレンジする必要がある（チップス氏談）。

●イノベーション・ラボ・インターナショナル（Innovation Lab,INTL） 8月21日（水）2:00pm～4:00pm

従来やってきた方法から新しい方法へと変革することをめざし、米日メンバーによるグル

ーペディスカッションを行った。テーマは「Not in My Back Yard～Building a Solid Waste Composting Facility～」(自分の裏庭に建ててもらいたくない(ニンビー)～生ごみの堆肥化処理施設建設の課題～)。ポイントは、カヌーのようなプロセスをたどり、新たな情報を得た時の目的の再設定を行うということ。また、2分法からの脱却、思いつきではなく、心を割って意見を出し合うこと。イノベーションは、リスクなものから始まることもある。失敗することを恐れず、信じて成し遂げること。イノベーションの過程を可視化(右脳を使う。)することも効果的である。

●ポートランドプラン (Portland Plan) 8月22日(木) 9:00am～11:00am

25年先を見据えた市の総合計画の更新作業を行っている。見直しにあたっては、見直し素案(30%DRAFT)を早期に公表し説明会を開催するとともに、分かりやすい資料の作成に配慮している。様々なステークホルダーを設定し、多くの段階を踏んで市民の期待感も高まっているとのこと。この作業のプロセスを複雑にしているのは、政治家が3回も交代していることも要因である。多様なコミュニティとの話し合いの中では、自分を見つめ直すことが多く、基本に戻って学び直し、練り直すことの連続である。この仕事において成功したと思うことは、プランの素案から決定したプランの内容がだいぶ変わったことである。それだけ多くの意見を聞くことができたことの証である。仕事の行きつくところは人間関係。とにかく続けていくこと。仕事の評価は、目には見えないが人間関係と市民の意識の高まり、長期的に見て行政に対する信頼関係ができたこと。また、子どもの意見を取り入れることもできた。

●ポートランド開発局 (PDC) 8月22日(木) 12:00pm～2:00pm



PDCのミッションは経済的に住みよいまちづくりである。地主との交渉においては、持続可能な開発の方法や戦略プランを示しながら、活動的で見た目にも美しい魅力を提案していく必要がある。PDCは事業開発に必要な人と資金を調達する。場所づくりは経済発展に寄与する。

●インタートワイン (The Intertwine) 8月22日 2:00pm～4:00pm

インタートワインは、直接市民に向けて活動するのではなく、組織に対して働きかける団体であり、協調のリーダーシップを持つ。NPOとしては2年間の活動歴があり、水や道、公園、自然に対するアクセスへの投資を行うことを目的にしている。そのミッションを絞り込むのに多くの年数をかけた。住民を巻き込む社交機会を用意している。問題を抱えながら進むことがリーダーシップではないか。インタートワインは、加盟団体のアドボガシーをするのではなく、目的を一緒にして勇気づけをしたり、資金を持ってきて実行に移すことを支援している。Explore (PARKS&TRAILS) →FIND (ADVENTURES) →LEARN (OUR REGION)のような活動のキャンペーンをするが、各団体の活動は多様で守るべきものは一緒。わざわざ遠くに行かなくても身近に自然を感じてほしいと思っている。様々なものを

組み合わせて使っていくしくみづくりや、目的別ではない協力関係をつくっておくことが必要である。リーダーシップの源は、立場、役割、情熱である。行政と市民の関係は多様であってよい。

●全体を振り返って

私は今回のポートランド訪問に際し、私なりの目標を持っていた。それは、物事を動かすときの人の思いに米日の違いがあるのかどうかを知ること―。制度比較調査を主とする海外調査プログラムが多い中、この度のプログラムはまさに人の内面に光を当てた、コミュニケーションを重視したものであったように思う。

一方的な制度紹介で終わることなく、米日の人間が考える過程をお互いに共有し、お互いの関心事項に引き付けて会話できるまたとない機会であった。なぜこのような経験ができたのかと考えると、やはり“市民のための大学”を信念に掲げる PSU と連携し、市民と行政機関（行政職員）の連携に関する理論的分析やコミュニケーション、実践を重視するプログラムを中心に置いたことだと思う。

そして、このような人の内面に向けた会話ができたのは、通訳スタッフの皆様が研修生の思いを丁寧に通訳していただいたことにほかならない。YES/NO だけの意思疎通を図るのであれば、あれほど丁寧な通訳は必要なく、当プログラムの真のねらいを全スタッフが共有されていたからではないか。また、PSU の学生さんも一生懸命に日本語を学んでいて、将来の夢や自らの考えを聞かせていただいたことはとても嬉しく思った。

私自身、実務担当者からマネージャーに移行していく時期を迎えている。この時期にこのような経験をさせていただいたことは、今後私の仕事に対する姿勢はもちろん、後輩の人材育成、市民との共同作業においても新たな視点から向き合えるものと信じている。

以上